

寺社縁起と霊地ネットワーク

－巖島神のイメージ構造をめぐって－

南カリフォルニア大学院生
京都大学外国人共同研究者
ジェシー・ドライアン

巖島神社は平清盛の後援により有力な霊場になったことが知られているが、その後、なぜ存続できたのか。本発表では、平家滅亡以降の巖島神社のイメージ構造を明らかにする試みとして、巖島の神に対する言及を含む寺社縁起及び宗教テキストを分析する。

近年、寺社資料の調査の高まりから、称名寺、真福寺などの寺院の寺社縁起を集積する活動、僧侶と寺院のネットワークに関する研究が発展しつつある。しかし、地方寺社の縁起がなぜ、中央の寺院で収められているのかはまだ明確ではない。そのため、中央に集積された巖島神社に関わる縁起を基に、中央と地方との関係、中世日本の国土観を考察したい。

現在する最古の巖島縁起は金沢文庫蔵の『巖島大明神日記』である。金沢文庫蔵の寺社縁起の多くと同じく、鎌倉後期に称名寺第二長老の釧阿（1261－1338）により書写された。だが、元々いつ、誰により作成されたかは記録されていない。起源が不詳にもかかわらず、同じ頃に集積された別の寺社の縁起や寺社文書と比較すれば、『巖島大明神日記』の作成の文脈と目的、巖島の神のイメージ構造についての手がかりを得ることができる。特に、蒙古襲来前後によく出現された八幡の縁起、並びに園城寺、延暦寺、西大寺に集積された巖島に言及している縁起、宗教テキストは『巖島大明神日記』との共通点が少なくないと考えられる。注目したい点は二つある。一つは、巖島の神が龍神として神功皇后と結びついているということ、そして二つは、巖島の神が龍神として弁才天信仰と如意宝珠信仰との繋がりが重視されているということである。このように、巖島の龍神信仰と如意宝珠信仰が平安時代から重要だったとは言え、中世には巖島の神のイメージは巖島の歴史、霊験というより、すでに存在する言説により構造されたと考えられる。

その上、もっと幅広い観点で考えれば、蒙古襲来前後における寺社縁起の集積活動は敵国降伏の祈禱を行った寺社の本尊の魅力を朝廷や幕府に主張し、恩賞を請求するために用いられたのではないかと推測できるのである。中央の寺社の縁起が巖島の神に言及しているので、中央の寺社が異国征伐の神話と強いつながりを持つ九州の霊地とのネットワーク、あるいは日本全国を結びつけるネットワークを示すと解釈できる。このように、地方の寺社と交流がなくても、中央寺社が縁起集積活動で地方の寺社のイメージを変え、利用できたという可能性が高いと考えられる。